

14の講義内容

『平家物語』の注釈 『平家物語圖繪』 凡例

MM103 『平家物語圖會』前編六冊・後編六冊。美本後刷り

MM139 『平家物語圖會』六冊。HEIKE MONOGATARI

高井蘭山先生校正／有阪蹄濟先生画圖「朱印：画圖精密」平家物語圖會（青鉛筆にてマレガ師記載）

／江戸書肆文魁堂「朱印：文魁堂記」自序の末尾識語に、「文政九年丙戌夏至 東武南郊芝伊皿子隠

士 高井蘭山叟題「丸印」「角印」

摠目錄

凡例

○平家物語發端に。祇園精舎の鐘の聲。諸行無常の響ありと書出たるハ。天竺の月蓋長者ハ。家富榮へけれ共。邪見放逸にて。釋尊五百人の羅漢を引て。託鉢修行あれ共。長者一錢一撮の施をせず。釋尊是を化度し。佛法に皈せしめ給へバ。無二の信者となり。資財を抛て。祇園精舎を當立。釋尊に 献れり。今云大堂伽藍也。鐘を架て撞。其響自然と諸行無常を觀すべし。老いたるも若きも。もろく死し行ざるハ一人もなし。千萬年も常住することは叶ぬ故。無常と云。沙羅双樹ハ天竺にあり。花咲てうつくしと眺る内に。うつろひ来るより。頓て散落る。盛なるものも。いつしか衰

ふ時あり。花開てより取早散ことハりの。知てあるに異ならず。太政入道官 禄身に餘り。一門まで榮花を究。美服美味管絃舞樂。酒色に耽るも。咲たる花に等くハ。衰へ散時なからんや。是を戒て諸行無常盛者必衰の句を取出たり。然るに入道相 國忠盛の子といへ共。実に祇園女御の生給へバ。清盛公と云人出て。天下を己が物とし。榮耀の限を壘すも。其根元祇園女御にかゝるゆる。祇園精舎の鐘の聲とハ書出したり。是等ハ筆を取ての活用と云もの也。○此物語ハ書ぶりも古風なるゆる。引書にも用るとあり。され共ふるびたる辞共ハ。女兒の耳に遠きあり。一ツには紙數も張大に至るを欲せざるまゝ。此彼書 更る処多し。止とを得ざれば也。凡此物語を讀兒女。心得となるべき種々を。一ツ一ツ出して會得しやすらかしむると下のと。し○

○二卷に丹波少將の辞。禁廷 筑紫太宰府より。腹赤の貢を献る。其使歩行路十五日と定たるよし書り。是平家物語を筆せし人の不穿鑿也。筑紫とハ九州の摠名也。肥後國宇土に腹赤の濱あり。腹赤ハ地名にて。魚の名にあらず。景行天皇筑紫を巡り見給ふ時。此処にて魚を供御に奉りし例にて。古より大内へ献ぜし也。太宰府と書しハ。作者推量の間違なるべし。順の和名抄に鮪の字を出す。されども此字。字彙。正字通。康熙字典にみへざれば。日本限の字とミへたり。此所にて網し献ずるハ。何と云定なし。俳諧季奇の鈔ものなどに。腹赤ハ鱒也と云も。取にたらず。腹赤と云濱にて捕し魚と云也。平家物語一部に。かゝる僻事共餘多なれば。物の明證に。引用るにハ足らずといへ共。唯其書ぶりの古めかしきハ慕し。○山とばかりあるハ比叡山のと也。○寺と斗ハ。三井寺のと也。○奈良と斗ハ。興福寺か東大寺の内を云○上日の者とハ地下にて勤番に當り詰居る者也。○咫尺するとハ。側に近よる也。○和州神南備山ハ訓にハ南備也。此類讀法。煙をけむりと訓仮名はけふり也。外際限なし。一々誌さず。

○凡僧の名は貴賤に拘らず。異音に訓と通例也。木曾殿の手書。大夫房覚明をかくめい。天台座主明雲大僧正をめいうん。三井寺の圓慶法親王をゑんけいと。平家物語に訓をつけしゆゑか。世上多く漢音に訓共。甚僻事也。たとへば佛教の熟字を名につく。正覚の覚無明の明を取て。覚明とつけんに。漢音に訓べき義なし。かゝる不吟味なる訓を是と心得て。本を讀んハ。片言に異ならず。第一耳に立て聞も聞苦し。右等の誤ハ悉くかな附を改正す。○丞相の仮名ハしようじやう。少將の仮字ハせうしやう也。此二ツのミハ細字繁き処。彫刻の煩しきを厭ひ。丞相少將とす。仮字差と笑なかれ。

○撰津ハせつと訓ず。紀伊ハきいと訓ず。撰津判官。紀伊守かく訓べし。縦ば百人首に。式子内親王家紀伊と訓べきを。しよくしないしんわうげきいなどゝ。あらぬを訓人も多し。かゝる片言のミ訓とハ。生涯國字文をも満足に讀得られず。我独讀たると思へど。聊事を辨たる人にハ笑はるべし。○芥下とハ草鞋のど。く革にて作たる也。○梶原源太景季箴の梅など平家物語になし。佐書より補ふ。此類外にも多し○

○鹿の字ハしゝ共しか共唱ふべし。ゐのしゝハ別にて猪と書。鹿狩と書バしゝがり也。豕彘ハ二字共ゐ共ぶた共訓。ゐのこハ豚と書。此類世俗心得違多し○

○悉多太子の馬金泥駒とは。何の書に取て書しにや。義楚六帖にハ犍陟馬とあり。○

○楷字の簡牒ハ婦女子に解がたきゆゑ。畧其意味を記し皆省く。○所々二行に小書するは早く分別さすべき為也。凡かなつかひハ訓ハ古假字。音ハ韻鏡に因て記す。以上平家物語に出るのミをいへ共。何をもち心得と訓ハ思ひ半にへん。

《用語》

1 【祇園精舎】中印度の拘薩羅国の都、舍衛城の西に、須達長者が釋迦とその弟子のために建立し、寄進した寺院。『今昔物語集』巻第一・須達長者、造祇園精舎二語第卅一に、

今昔、天竺ノ舍衛國ニ一人ノ長者アリ、名ヲバ須達ト云フ。其ノ人、一生ノ間ダニ七度富貴ニ成リ、七度貧窮ニ成レリケリ。其ノ第七度ノ貧ハ前ノ六度ニ勝レタリ。牛ノ衣許ノ着物无シ、菜ニ合ス許ノ食味无シ。然レバ夫婦共ニ嘆キテ世ヲ過ス程ニ、近隣ノ人ニモ憎レヌ、親族ニモ厭ハレヌ。

而ル間、全ク三日ニ不食シテ既ニ餓死シナムトスルニ、一塵ノ財ヲ无シト云ドモ空キ倉許ハ有ルニ行キテ、塵許ノ物ヤ有ト見レバ、梅檀ノ升ノ片角破レ残テ有ケリ。此ヲ見得テ、須達、自ラ市ニ行テ米五升ニ賣テ家ニ持テ来テ、一升ヲバ取テ菜ヲ買ハムガ為メニ、又市ニ出ヌ。其ノ程ニ、妻、一升ヲ炊テ須達ヲ待ツ程ニ、佛ノ御弟子解空第一ノ須菩提来テ食ヲ乞フ。妻、鉢ヲ取り、其ノ炊タル飯ヲ一粒ヲ不残サズ供養シツ。然バ又一升ヲ炊テ夫ヲ待程ニ、又、神通第一ノ目連来テ食ヲ乞フ。又前ノ如クニ供養シツ。然バ又、一升ヲ炊テ夫ヲ待程ニ多聞第一ノ阿難来テ食ヲ乞フ。前ノ如ク供養シツ。其ノ後、妻獨リ思フ様、「米今一升残レリ。白ク精ゲテ炊テ夫婦共ニ此ヲ食セム。此ヨリ後ニハ何レノ御弟子来リ給フト云トモ敢テ供養シ奉ラジ」ト、「先ヅ我が命ヲ繼」ト思ヒ得テ炊クニ、未ダ須達ノ不返ザル程ニ、大師釋尊来リ給テ食ヲ乞給フ。妻、サコソ云ツレドモ佛ノ来リ給ヘルヲ見奉テ隨喜ノ涙ヲ拭テ礼拜シテ皆供養シ奉リツ。其時ニ、佛、女ノ為ニ偈ヲ説テ宣ハク、

貧窮布施難 富貴忍辱難 厄嶮持戒難 小時捨欲難

如此キ説キ聞セ給テ返リ給ヒヌ。

其後、酒達返リ来レルニ、妻、羅漢及ビ佛来リ給ヘル事ヲ夫ニ語ル。夫ノ云ク、「汝ヂ、我が為メニ生々世々ノ善知識也」ト云テ、妻ヲ喜ブ事无限リナシ。其ノ時ニ、自本有ル三百七十ノ庫蔵二本ノ如クニ七寶満ヌ。其ヨリ又富貴无並カリケリ。此ノ度ノ富、又前六度ニ倍倍セリ。然レバ、長者、永ク世ニ名ヲ擧テ閻浮提ノ内ニ並ブ者无シ。而ル間、長者、心ノ内思ハク、「我レ勝地ヲ求テ伽藍一院ヲ建立シテ釋尊及御弟子等ヲ居奉テ、一生ノ間、日々ニ供養シ奉ラム」ト思フ心深シ。

其ノ時ニ、一人ノ太子有アリ、名ヲバ**祇陀**ト云フ。此ノ人、甚ダ目出キ勝地ヲ領リ、水・竹左右ニ受ケ、草・樹前後ニ並ベリ。須達、太子ニ語テ云ク、「我レ佛ノ御為メニ伽藍ヲ建立セムト思フニ、此ノ地足レリ。願クハ、太子此ノ地ヲ我ニ与ヘ給ヘ」ト。太子、答テ云ク、「此ノ地ハ東西十里、南北七百余歩也。當國・隣國ノ豪族ノ人来テ乞ト云ドモ于今不与ズ。但シ、汝ガ云フ事ニ至テハ既ニ佛ノ御為ニ伽藍ヲ建立セムト也。敢テ惜ム心无シ。然レバ、地ノ上ニ金ヲ六寸敷テ直ニ得シメヨ」ト。須達、太子ノ言ヲ聞テ喜ブ事无限ナシ。忽ニ車馬・人夫ヲ以テ金ヲ運テ地ノ上ニ厚サ五寸ヲ敷キ満テ、太子ニ与ツレバ、長者思ノ如ク地ヲ得ツ。其ノ後チ、伽藍ヲ建立シテ一百余院ノ精舎ヲ造ル。其ノ庄嚴微妙ニシテ嚴重ナル事无限シ。中殿ニハ佛ヲ居ヘ奉リ、院々房々ニハ深智ノ菩薩等及ビ五百ノ羅漢等ヲ居ヘ奉テ、心ニ随テ百味ヲ運ビ備ヘ、珍寶ヲ満置テ卅五箇年ノ間、佛及ビ菩薩・比丘僧ヲ供養シ奉ル。祇園精舎ト云フ、此レ也。須達ガ妻ノ善知識ニ依テ取後ノ富貴ヲ得テ、思フガ如ク伽藍ヲ建立シテ佛ヲ供養シ奉レル也ケリトナム語り傳ヘタルトヤ。

このように、「祇園精舎」の建立譚が語られている。また、『徒然草』第二百二十段にも「凡(オヨ)そ、鐘の聲は黄鐘調なるべし。これ、無常の調子、祇園精舎の無常院の声なり」と引用されている。大相國入道平清盛の生母祇園の女御と連関せしめての書き出しと云うこと、平安時代の紀貫之『土左

日記』の冒頭部「男もすなる日記といふものを女もしてみむとするなり」と歌の懸詞のように「男文字」と「女文字」とを暗喩するに共通する。この冒頭文の解釈には奥深きことが潜んでいることを指摘していると見たい。

2 【腹赤】

筑紫の太宰府より都へ、**腹赤の使**の上るこそ、かた路十五日とは定たれ。既に十二三日と云は、是より殆鎮西へ下向ごさんなれ。遠しと云とも、備前備中の間、兩三日にはよもすぎじ。近きを遠う申は、大納言殿の御渡有なる所を成経に知せじとてこそ申らめ。」とて、其後は戀しけれ共問ひ給はず。源順『倭名類聚抄』に、「**鮠魚** 弁色立成云―音宣。波良可。今案所出未詳式文用**腹赤**二字」(十卷本卷第八第四册23ウ③)とあって、「式」とは『延喜式』を云うか。『日本国語大辞典』第二版に、**はらか**【**腹赤・鮠**】(名) (「はらあか」の変化した語) 魚「にべ(鮠)」の異名。一説に「ます(鱒)」の異名という。毎年正月、大宰府から朝廷に献上した。はらこ。*内裏式(八三三)会「訖退出即膳部水部等入自承秋門」。取**冰様腹赤**御贄。*新撰字鏡(八九八〜九〇一頃)「波良加」*十卷本和名抄(九三四頃)八「鮠魚 弁色立成云(音宣)波良可 今案所出未詳式文用**腹赤**二字」*小右記、永観三年(九八五)正月二日「腹赤今日到着」*山家集(十二C後)下「つくしに、はらかと申すいの里にいと生臭き魚、はらかといふ有りけり」【発音】平安・鎌倉【辞書】字鏡・和名・色葉・名義・下学・文明・伊京・伊京・天正・饅頭・黒本・易林・日葡・書言・言海【表記】鮠(字鏡・名義・下学・文明・伊京・天正・饅頭・黒本・言海)腹赤(色葉・名義・易林・書言・言海)鮠(色葉・名義)鮠魚(和名)腹香(伊京)【項目】①はらかの奏②はらかの使③はらかの贄のとあって、この初出例に「内裏式(八三三)会から引用する。

『字彙』『正字通』『康熙字典』に未収載

3 略語【山・寺・奈良】

【山】 比叡山

【寺】 三井寺

【奈良】 興福寺・東大寺

4 【上日の者】 じょうにちの者 一定の日に宮中や院に出仕する、朝廷の下級の臣。六位藏人や滝口が任にあたった。*今昔物語集「二二〇頃か」卷三二・第五「上日の者」宮の侍・可然き諸司の尉の子など、賀に成らむと云せけれども」*高野本平家物語「十三C前」卷四・殿島御幸「年官・年爵を給はつて、上日のものをめしつかふ」*御伽草子・唐糸草子「室町末」「急ひで信濃へ下れとて、ちやうにちの者を添へらるるを」

5 【咫尺する】 辰

し・せき【咫尺】「名」①「咫」は中国の周尺で八寸 約一八センチ、「尺」は一尺で一〇寸 約二二・五センチの意 尺度の短いこと。距離の近いこと。*経国集「八二七」一四・奉和清涼殿壁画山水歌〈都腹赤〉「名山大水宛然是。咫尺能分三千里」*本朝文粹「一〇六〇頃」九・聖化万年春詩序〈大江朝綱〉「望龍顔於咫尺。奉鳳於尋常」*平治「二二〇頃か」中・義朝野間下向の事「ひとり人の心のおひむかへる時、咫尺の間もはかる事あたはず」*御伽草子・鴉鷺合戦物語「室町中」「計り事を帷幕の内にもぐらして、かつ事を千里の外、しせきの下にえたり」*歌謡・閑吟集「一五一八」「千里も遠からず、あはせば咫尺も千里よなふ」*俳諧・鶉衣「一七二七〜七九」後・中・六六・与時節庵文「咫尺に淨刹の多くて、朝夕数十歩を勞せずして、仏に向ひまいらせん事いと安ければ」*戦国策・肅侯「舜無咫尺之地、有天下」②（―する）（春秋左伝・僖公九年）の「天威不

違顔咫尺」から）貴人などに近よること。拜謁すること。*田氏家集「八九二頃」上・和高侍中鎮夷府貢良馬數十疋、有勅頒賜、偶題長句「為君占得龍媒賜」。咫尺雲霄「任意驤」*中右記・嘉保二年「一〇九五」一〇月九日「数剋候御前、抑未咫尺龍顔之習、汗如周勃歎」*文机談「一二八三」三「龍顔にしせき仕けるといふは、物をよの家よりもすくなくしれりける高名によりて也」*太平記「十四C後」四・備後三郎高德事「玉辰に咫尺して被召仕ける人としては、六条少将忠頭」*読本・椿説弓張月「一八〇七〜一二」拾遺・附言「あるとき白衣の童子、忽然と出現して、帝に咫尺したてまつり」*金色夜叉「一八九七〜九八」〈尾崎紅葉〉前・一「世に愛たき宝石に咫尺咫尺するの榮を得ばやと」【発音】シ【辞書】色葉・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林・日葡・へボン・言海【表記】咫尺（色葉・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林・へボン・言海）【項目】①しせきを 弁ぜず「わきまえぬ」

6 【神南備山】：「神南備山」〔m・b音相通例〕

かみなび・やま【神奈備山】「かみなびやま（神奈備山）」に同じ。

*片仮名本後撰和歌集「九五〜九五三頃」夏・一八七「ワタヒ子シテツマコヒ爪ラシホト、キ爪神ナヒ山ニサヨフケテナク（よみ人しらず）」*千載和歌集「一一八七」神祇・一二八一「ときはなるかみなび山の榊葉をさしてぞいのるよろづよのため（藤原義忠）」

7 僧名： 吳音に訓と通例

A 木曾殿の手書。大夫房覺明をかくめい。

B 天台座主明雲大僧正をめいうん。

C 三井寺の圓慶法親王をゑんけい

◎木曾殿大に悦で、手書に具せられたる大夫房覺明を召て、「義仲こそ幸に新八幡の御寶殿に近附奉

て、合戦を既に遂げむとすれ。如何様にも今度の軍には相違なく勝ぬと覺ゆるぞ。さらんにとては、且は後代の爲、且は當時の祈禱にも願書を一筆書て參せばやと思ふは如何に。」覺明「尤然るべう候。」とて、馬より下て書んとす。『平家物語』卷第七]

【手書】しゅ・しよ【手書・手署】「名」直接、自分の手で書くこと。また、そのもの。自筆の手紙。親書。*続日本紀・和銅六年〔七一三〕五月己巳「具得手書陳牒所司、待報処分、撰撰替補」*台記・久安六年〔一一五〇〕四月二七日「今且右大将来接法皇手書即以拝見」*雜誌集〔一三〇五〕一〇・読経徳事并神徳「ゆかりたる物々中に手書（シユシヨ）〔注〕テカキ）して渡世しけるが」*松隣夜話〔一六四七頃〕下「金子を二百両程被下、御手書を給り、北条氏康へ差越玉ふ」*欧米印象記〔一九一〇〕〔中村春雨〕倫敦日記・七月三日「シヨウ氏はジャクソンの書名を一つ書いてくれた、其手署は長く我書齋の珍藏物の一となった」自分の手で自分の氏名を書くこと。自署。*歌劇フォーストを聴くの

◎天台座主明雲大僧正、寺の長吏圓慶法親王も、御所に參り籠らせ給たりけるが、黒煙既におしかければ、御馬にめして、急ぎ河原へ出させ給ふ。武士共散々に射奉る。明雲大僧正、圓慶法親王も、御馬より射落されて、御頸取られさせ給ひけり。『平家物語』卷第八]

8 仮名表記：【丞相】丞しやうじやう相じやうの仮名ハしようじやう。少將せうじやうの仮字ハせうじやう

9 訓読：【撰津】【紀伊】

10 【芥下】『日国』は【下下】にて収載。

◎下人共呼寄せ、最後の有様妻子の許へ、言遣はし、馬にも乗ず、**げ**をはき、弓杖を突て、生田森の逆茂木を上こえ、城の中へぞ入たりける。星明りに鎧の毛もさだかならず。『平家物語』卷第九

・二度之懸

げ・げ【下下】「名」①しもじもの人。身分の低い人たち。しもじも。*名語記〔一二七五〕五「下々といふ義歟」*日葡辞書〔一六〇三〜〇四〕「Guegue (ゲゲ)〔訳〕公卿以外のすべての人々」*滑稽本・八笑人〔一八二〇〜四九〕五・中「今おめへの双(なら)べた一一の所は、いづれも下々の者の這入る所だから」②ひじょうに劣っていること。最下等のもの。下等の下等。下の下。上上(じようじよう)。*狂歌・吾吟我集〔一六四九〕三「うつくしきむくげの花にくらべては下々とや見まし色もなき草」*地方凡例録〔二七九四〕二「扱士の位上々と下々は人力にて如何とも仕難し」*俳諧・七番日記・文化一〇年〔二八一三〕一〇月「下々も下々下々の下国の涼しさよ」*文明開化〔一八七三〜七四〕〔加藤祐一〕初・上「あたまをむき出しにしておは、世界中の下々の下国の人のする事で、開化の国には決してない事でムる」③(しもじものはく履物の意から)わらぞうり。金剛ぞうり。*平家〔十三C前〕九・二度之懸「馬にもならずけけをはき、弓杖をついて」*名語記〔一二七五〕五「下下」五「下下」のほき物にげげ、如何。げきといふをけけといいなせる也」*日葡辞書〔一六〇三〜〇四〕「Guegueno (ゲゲウ)「ハク」*俳諧・毛吹草〔一六三八〕六「下下の足も土をふまぬや雪の道〔正章〕」④下郎。下僕。ぞうり取り。*随筆・嬉遊笑覧〔一八三〇〕二・中「僕人を契俄とあるは九州あたりにて草履取をしかいひしを伝へて書るべし」【方言】(「下々の者の履くもの」の意)草履。

《げげ》佐賀県(粗末なもの) 887 《げんげ》新潟県 347 げた。幼児語。《げげ》京都府竹野郡 622 《げえげえ》静岡県 520 《げんげえ》新潟県佐渡 352 静岡県 520 《げんげ》静岡県 520535 《げんげん》新潟県佐渡 358 最後。しんがり。《げげ》鳥取県岩美郡 716 《げんげ》島根県簸川郡 725 【発音】ゲゲゲ
〈1〉／〇ゲ〈2〉【辞書】日葡・言海【表記】下下(言海)【項目】①げげの下②げげの下の客③げげの楽は寝楽

11 【箆の梅】

えびらの梅 ①寿永三年(一一八四)の春、源平両軍の生田の森の合戦に、梶原源太景季(一説にはその父景時とも)が、梅の枝を箆にさして戦い、功名をあげたという故事。神戸市の生田神社の境内にその遺跡がある。えびらうめ。*浄瑠璃・彦山権現誓助剣「一七八六」九「咲き乱れたる紅梅の、花の一枝折持って、『なうなう我夫、梶原源太景季は、平家の陣に切入って、譽を揚げし箆の梅、是は敵の京極に、勝色見する兄花の、可愛男へ寿』と」②梅の一品種の名。花はまばらにつき、淡紅色、大形でやや桃の花に似ている。《季・春》*俳諧・年浪草「一七八三」春・二「梅〈略〉箆梅中花如越中梅所謂梶原源太景季折枝挿于箆云々」「えびら(箆)」の古名。「項目」①えびらを叩く

12 【鹿狩】【冢處】

13 【金泥駒】※『運歩色葉集』に収載標記語。

◎昔悉達太子の檀特山に入せ給し時、舍匿舍人がこんでい駒を給はて、王宮に還りし悲も、是には過じとぞ見えし。『平家物語』卷第十・三日平氏』※延慶本×

こんでい・こま【榎陟駒】(Kantaka の音訳) 悉達太子が王宮を去って出家した時に乗った馬の名。

*梁塵秘抄「一一七九頃」二・雑法文歌「太子の御幸には、こんでいこまに乗りたまひ、車匿舍人に口取らせ、壇特山にぞ入りたまふ」*平家物語「十三C前」一〇・三日平氏「むかし悉達太子の檀特

山に入せ給ひし時、しゃのくとねりがこんでい駒を給はつて、王宮にかへりしかなしみも、これには

すぎじとぞみえし」*俳諧・俳諧之連歌(飛梅千句)「一五四〇」墨何第一〇「しつたたいしの過る

春ののひはり毛のこんでい駒にうちのりて」*運歩色葉「一五四八」【金泥駒 こんでいこま】【辞

書】書言【表記】榎陟馬・乾陟馬(書言)

と書で専ら海内を行るを。是をくまう。○田代冠者俗姓を尋
ゆと書一然然と田代の冠者の僧の如く竹と難ぢる人あり。左ふあは今
諸國の武家も列座をまた。素性へ後二條院の皇子輔仁親王も五代ゆえ
王氏遠く凡るるぬ。僧俗の對言ゆあは。雲上と凡俗との差別ゆくえ
○榎津のせんほと別を紀伊の訓に。榎津判官紀伊守かく別べ。縦心
百人首の式子内親王家紀伊と別を。まはくちのいし。さうびのいさど。あはぬ
とを別人もま。かちる片言のそ別とへ生涯國字文をも満足し續はれ
は。我独續くるとどど。聊夏を辨くも人ぬ笑をえ。○林下と草鞋の
どく草をて作るん。○梶原源太景季。熊の梅など平家物語ゆえ。依書
より補ふ此類外もま。○蒲冠者九郎冠者も従ふ。面々の姓名源平盛
衰。元義經記の類を。扱比まふ少く。相違あり。実名ゆも相違言けし。孰